社畜は作り物の檻で幸せを願う

さくららんらんぼ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

▼―…あぁ、私の人生は何だったんだろう。私は何のために産まれたんだろう。私が産まれたことなんかに、意味があったのかな。

▼―人生に疲れ、実母に殺害された社畜。転生し少女として生まれ変わった社畜は、そこでかけがえのないものと愛を知る。

▽※前半シリアス気味です。多少の流血表現があります。ご注意下さい。

▽※モブの名前捏造しています。

▽※死んでいる筈の原作キャラが生き残ったりします

目次

幼少期
この世界の真実と始まり ―― 1
優しい世界 ―― 22
小さな妹 ―― 33
幸せの終わり ―― 44
見捨てる ―― 61

幼少期
この世界の真実と始まり

あぁ、死にたいなぁだなんて思ったのはこれが初めてのことでは無かった。

目の前で包丁を持つのは、私を産んだ人だった。暗闇で光る刀身だけが不気味に浮かび上がる。私は距離を取りながら、これまでの人生を思い出していた。

—…あぁ、私の人生は何だったんだろう。私は何のために産まれたんだろう。私が産まれたことなんかに、意味があったのかな。

目の前の人が叫びながら包丁を振りかぶる。私は逃げようとしてー…途中で足を止めた。

——私の生きてきた日々に、意味があったのなら教えて欲しい。これから私が生きていく日々に意味があるなら教えて欲しい。

どん、とお腹に衝撃。一拍置いて私は倒れた。床にどくどくと生暖かい血が広がっていく。

薄れゆく意識の中、ゆっくりと頭が働かなくなっていく。最後に少しだけ、祈っても祈っても救ってなどくれなかった存在に悪態をついた。

―これだけ祈ってるんだからさ、ちょっとくらい報われたっていいんじゃないの。ねぇ。――神様。

＊

『――おぎゃあ、ふぎゃ、ふぎゃぁ』

何処かで赤ん坊の泣き声がするなぁ。そう思いながら私はゆっくりと目を覚ました。

何だかとても長い夢を見ていた気がする。

「―Ｎｏ．○○○○――そいつはそちらの部屋に――――そう○○を――連れていけ」

夢見心地な気分のまま、私は誰かに抱え上げられた。私はもう２０歳を超える大人なのに、よく軽々と持ち上げられたなぁ。ふわふわとした思考が浮かんではゆっくりと消えていく。

カツカツと靴音の様なものが反響している。ここは何処だろう。その度にゆらゆらと体が揺れるから、私は抱き抱えられたまま移動しているのかもしれない。

やがて私は別の誰かに手渡された。暖かくて、柔らかくて、優しい腕。

「Ｎｏ．○○○―マリー。あなたは今日からここで暮らすのよ。よろしくね。」

耳に入るのは泣きたくなるほど優しい声。何だかとっても幸せだなぁ。誰かに抱き抱えられることなんて、何年ぶりだろう。出来ることならずっと、この腕の中にいたい。

ふわりと頭を撫でられた。壊れ物に触れるような繊細な手付き。ゆっくりと目を開くと、とても美人な女の人と大きな大きな建物が見えた。

――私は、この女の人を見たことがある気がする。この建物も。どこで見たんだっけ。

「さぁ着いたわ。ようこそ、〝グレイス＝フィールドハウス〟へ。」

そして私はゆっくりと、この幸せな記憶を忘れていった。

これから始まる幸せも、その先に待つ地獄も。

私は何一つ、分かってなどいなかったのだ。

＊

「マリー、そろそろ起きなければ駄目よ。またこんな所で寝て。」

ママが私の髪を撫でる。さっきまで廊下で寝ていたせいか寝癖がぴょこんと勢いよく跳ねた。
ママがくすくすと笑って髪の毛を撫でつけてくれる。
「後で整えてあげるわ。私の部屋へいらっしゃい。」
「うん！」
私は元気よく答えて、ママの後を追った。

――――『母と慕う彼女は、親ではない。共に暮らす彼らは兄妹ではない。ここグレイス＝フィールドハウスは孤児院で、私は孤児。』

「あ、マリーだ！おはようマリー！」
「あはは、マリーまた寝癖が付いてるよ？」
「お前また寝てたのかよ。朝飯に遅れるぞ。」

からかい混じりに皆が声を掛けてくれる。そう、私の名前はマリー。寝るのが好きなごく普通の、何処にでもいる平凡な少女。
「待ってて！すぐ行く！」

――『そう、思っていた。』

「もう、マリーったら相変わらずね？」

慌てて席に着くと隣の席のダリアが話しかけてくれた。ダリアは私より年が五つも上の頼れるお姉さんで、何時も私のことを気にかけてくれる。

私はそんなダリアが大好きで、四六時中彼女にべったりだった。

暫くして、テーブルの上にズラリと料理が並んだ。今日はパンと牛乳、それに豆とトマトを煮込んだスープ。私は大好物だったのですぐにかぶりついた。

ダリアが苦笑しながら私の口元を拭いてくれる。

「あのね、ダリア、」

「ん？どうしたの？」

私はちょっと考えた後に決意して、今日のデザートをダリアに差し出した。今日のデザートは林檎だ。私の大好物。

「林檎、食べないの？」

ダリアに聞かれた後、フルフルと首を振る。ずっと前から決めていたのだ。林檎が出る今日は、ダリアにあげようって。

「…あのね、ダリアもういなくなっちゃうでしょ?だから、わたしからのプレゼント。」
ダリアが目を見開いた。少し笑ってぎゅっと私を抱き締めてくれる。
「ありがとうマリー。大事に食べるね。」
私は嬉しくなって、こくこくと思いっきり頷いた。

―『施設での暮らしは永遠じゃない。12歳になるまでには皆、里親を手配され巣立っていく。それもまた慣例。』
「何だか皆と離れるのは寂しいなぁ。」
出て行く直前、そんなことをダリアが言うもんだから皆揃って泣き出してしまった。
つられて泣きそうになった私に、ダリアがしゃがみ込んで目線を合わせてくれる。
「いつもありがとうねマリー。絶対手紙書くからね。読んでくれると嬉しいな。」
ダリアの手は暖かい。私は思いきりダリアに抱き着いた。その隙に1枚だけ、ダリアの胸ポケットに折り紙を差し込む。
「じゃあねダリア、元気でね!」
ママがドアを開け、ダリアが手を降りながらドアを潜る。私はダリアが見えなくなるまで手を振り続けた。
「ねぇねぇマリー、ダリアへのサプライズ成功した?大丈夫だった?」

後ろからひょこっと顔を出したエマが私に聞いてくる。私は笑顔で答えた。

「うん！成功したよ！ダリア気付いてなかった！」

―そう、私は大好きなダリアの為、サプライズを計画していた。それはダリアに宛てて手紙を書く事だった。

別に出て行く前に後で読んでね！と言って渡しても良かったけれど、それじゃあ物足りないなと思ったのだ。

大好きなダリアの旅立ちだからもっととびきりのサプライズをしたい。

そこで同い年のエマに相談をしてみることにした。エマは小さな折り紙に手紙を書いて、出発する直前にバレないように忍ばせてみたら？と提案してくれた。なので私は早速掌大の折り紙に手紙を書いて、出発直前にダリアの胸ポケットに入れることにしたのだ。

ダリアが手紙に気付くのは新しい家族と出会った後かもしれない。その時ダリアは喜んでくれるかな。驚くかな。

ダリアのびっくりした顔を想像して、そうであったらいいな、なんて考えながら私は部屋へと戻った。

＊

何故かその夜は酷く寝付けなかった。いつもはすぐ寝てしまえるのに、何度寝返りを打っても眠くなる気配がなかった。

最終的にトイレに行きたくなって私は困ってしまった。夜のハウスのトイレはとっても怖いのだ。暗くて見えない廊下の端にもしかしたらお化けがいるかもしれないと思うと、足が竦んで動けなくなる。

いつもならダリアに頼んで付いてきて貰うのだけれど、今日からもうダリアはいない。誰かを起こして付いてきて貰おうにも皆ぐっすり眠っていて、起こすことは出来そうになかった。

私は次の誕生日で6歳になる。もうお漏らしをしていい年じゃない。トイレにいけずお漏らししてしまうより、怖くてもトイレをすまして帰ってきた方がよっぽど良い。

自分にそう言い聞かせることにして部屋を出た。トイレは2階の突き当たり。子供部屋からは距離があって、トイレまで続く長い廊下を頑張って歩かなければならなかった。

怖かったので私は目をつぶって耳を塞いだ。そのまま足早に廊下を進む。すると少しして、勢いよく何かとぶつかった。

「あら？マリー？…どうかしたの？」
ぶつかったのはカンテラを持ったママだった。どうやらダリアを見送って帰ってきた所らしい。私はほっとしてしまって、ママに縋り付いて泣いてしまった。
「よしよしマリー。トイレに行きたかったのね？大丈夫よ。途中までついて行ってあげるわ。」
ママはその言葉通りトイレの場所まで手を繋いでいてくれた。やっぱりママがいると、一人で行くよりずっと怖くない。
ママは私がトイレを済ますまで、出口でずっと待っていてくれた。終わって私がトイレから出てくると、ママは少し申し訳なさそうに言った。
「ごめんねマリー、私はこれから仕事が残っているの。子供部屋へは一人で戻れるかしら？」
私はママの言葉にこくりと頷いた。もう少しずつ外が明るくなっていたし、戻るくらいなら一人で出来そうだって思ったから。
ママは私を見てにこりと微笑むと、頭を撫でてくれた。私はそれだけで嬉しかった。
ママが階段を降りていくところを見送る。丁度ママが見えなくなった頃に、足元に小さな紙が落ちていたことに気付いた。
「…あれ？」

その紙はくしゃくしゃにシワがより、丸まっていた。もしかしたらママにくっついてここまで来てしまったのかもしれない。

私は深く考えずにその紙を拾った。何故かその紙は湿っていた。赤茶色のシミが酷いそれを掌で伸ばして、それから廊下の明かりに照らす。

『だいすきなだいすきなダリアへ。
あたらしいところへ行ってもげんきでね！
わたしはダリアのこと、ぜーったい！わすれないよ！
マリーより！』

「……え？」

ガツンと頭を殴られたような衝撃だった。
遅れて暴れるように心臓が動き出す。
だってこれは、この紙は。

――…私がダリアに、宛てた手紙だ。

嘘だ、だってこんな所にある筈が無い。だって私はちゃんとダリアの胸ポケットに入れたのだ。今頃ちゃんとダリアの元に届いている筈なんだ。

もしかして、もしかして、ダリアが出て行く時に落ちてしまったとか？それでママにくっついてここまで来てしまったとか？

いや、そんな訳ない。昨日も一昨日も雨なんか一度も降ってない。昨日ダリアに渡して、まだ一晩も経っていないのに、湿っているのはおかしいよね。こんなにシミが出来ているのは、おかしい、よね。そうだよね？

ガラガラと私の中の何かが、音を立てて崩れていく。

――…じゃあ、この紙に付いているシミは、一体何？

紙を強めに摘んだ。手に付いたのは焦げ茶色。

…血の、色。

「う、そ、…だ」

フラフラ、足元が定まらない。頭がグラグラする。カクンと膝から力が抜けて、その場にへなへなと座り込んでしまった。

「…ダ、リア…」

ぷつん。繋いでいた糸が切れるように、私はその場で意識を失った。

＊

その時、私は夢を見た。

夢の中で私は、普通の人間だった。普通の会社に務めて、普通に働いて、毎日を過ごす普通の人間だった。

そうだ、どうして忘れていたんだろう。

その日は、朝からずっと働いていて。定時になっても、タイムカードを切っても、帰ることが出来なくて。

最終的に終電も逃して、家まで歩いて帰らなければならなくなって。

寝不足で頭が働かなくて。

家に縁を切った母親が来ていることにも気付かなくて。
玄関先で待ち伏せをされていて、包丁を向けられて、それから、それから。
―そっか、私は死んだんだ。あの時、お腹を刺されて、そのまま。

「―マリー、マリー？起きて！マリー！こんな所で寝てたら風邪引いちゃうよ！」

ぺちぺちぺち。頬を叩かれる衝撃で目が覚めた。目の前によく知った顔のどアップがある。
「ほらほらおーきーてー!!もー！起きてってばー！」
私は思わず飛び起きた。びっくりした。激しく胸が高鳴る。あれ、待って、何処からが夢で、何処までが夢…？
「そろそろ皆起きるよ！起きたなら一緒に洗面所にいこ！」
ぐいぐいと手を引っ張られる。私の手を引くのは―エマ。小さい頃から一緒の、同い年の私の兄妹。
…ちょっと待って、私はエマを知っている。同い年だからじゃなくて、他のことで。

生活が苦しくて、友人から借りることでしか読めなかった大好きな週刊誌で、よく知っている。

――〝約束のネバーランド〟に出てくるエマだ。元気いっぱいで真っ直ぐな、主人公の。

「あれ、エマにマリー。おはよう。今日はマリーも早いんだね。」

混乱したまま手を引かれ、辿り着いた洗面所には既にノーマンがいた。…私と同じ年で、兄妹で…約束のネバーランドの、登場人物のノーマンが。

頭にハテナマークが派手に散った。何で漫画のキャラクターがここにいるんだろう。どうして私の兄妹が漫画のキャラクターになっているんだろう。あれ?どういうこと?何だか日本語がおかしいぞ。

「おいマリー、ここでぼーっとするなよ。邪魔になるから端によれ。」

立ち尽くしているとぐいっと服を引っ張られた。そのままよろよろと洗面所の端へと移動させられる。

私の服を引っ張ったのはレイだった。同じく私の兄妹で、同い年で――…約束のネバーランドに出てくる…レイ、だった。

ちょっと何言ってんのか分かんない。何が起こっている？

「なんだお前、まだパジャマから着替えてないのかよ？」
「あのね、マリーったら廊下で寝てたんだよ！途中で見つけたから起こしてきたの！」
「えぇ…それは良くないよ、マリー。風邪引いちゃうよ。」

私の葛藤など知ったこっちゃないとばかりに三人にやいのやいのと話しかけられる。いつもと同じ、〝朝のお馴染みの〟パターンだった。今までずっと当たり前だと思っていた朝の光景。
「ねぇねぇ、そう言えばダリアはもう新しい家族にあったかなぁ？」
「…どうだろう。そろそろ向こうに着いてるんじゃねぇの？」
「やっぱり、ダリアが居ないと寂しいね。」
三人が、優しくその名を口にした。

――そうだ、ダリアだ。私の、大好きだったお姉さん。

「…っ、う、うぇ、」

勝手に喉奥から嗚咽が漏れた。ぼろぼろと涙が頬を伝う。
エマが慌てたように服の裾で私の涙を拭ってくれた。しかし私の涙は止まらない。
ダリア。大好きだったお姉さん。ずっとずっと大好きだった。いつも一緒にいてくれた。血が繋がっていなくても本当の、兄妹のように思ってたのに。

――『もう、マリーったら相変わらずね？』

「う、ぁ、ぁぁぁぁぁっ！」

くしゃり。固く握っていた手の中で、小さく紙が音を立てた。
ダリアに宛てた、私の手紙。
血塗れのそれが意味するのは、ダリアの死。
…そうだ、ここはグレイス＝フィールドハウス。表向きは幸せな孤児院。
けれど、本当は。―鬼の為に『食料』を育てる『農園』なのだ。

「な、泣かないでよ、マリー…」
エマとノーマンが私の背中を摩って慰めてくれる。けれど私の涙は止まらず、結局レイがママを呼んで来てくれるまで大声で泣き続けた。

＊

――ダリア、ごめんね。助けてあげられなくてごめんね。何も出来なくて、ごめんね。
ダリアがゆっくりと振り返る。ダリアはわたしと目が合うと、困ったようにに目を細めた。
『ねぇ、マリー。…私の分まで頑張ってね。』
ただの私の妄想に過ぎなかったのかもしれない。けれど、確かに――そう聞こえた気

がしたのだ。

泣き疲れた私は、いつの間にか眠っていたらしい。気が付くと医務室のベッドに寝ていて、枕元にはお見舞いの物なのか、色とりどりの草花が花瓶に生けてあった。

側に添えられた折り紙には、拙い字で『げんきになってね　　エマ』と書かれている。

他にも幾つか労いの言葉の書かれた折り紙が置かれている。きっと、皆で草花を摘んできて用意してくれたんだろう。

エマ達が草花を探すところを想像して、似合わないなぁなんて少し笑ってしまった。心の奥が暖かくてぽかぽかする。元気になったらまた、お礼を言いに行かないと。

ベッドから立ち上がって、窓から外を覗き込んでみる。丁度自由時間で、皆で鬼ごっこをして遊んでいるみたいだった。ノーマンに捕まってしまったドンが泣き出して、慰めるようにエマが頭を撫でている。

…賑やかで、楽しくて、幸せな…〝いつも通り〟の生活がそこにあった。

ギルダが私に気付いて手を振ってくれた。エマが両手を口に当ててメガホンのようにして、呼びかけてくれる。

「マリーー!!元気になったーー!?」

…そうだ、エマは漫画のキャラクターだとかそれ以前に私の大事な家族だ。小さい頃からずっと一緒に育ってきた、大好きな私の兄妹。

「ありがとう!もう大丈夫ーー!!」

――『ここは農園、私は食料』

私もエマも他の兄妹も、食べられる為に生きて来た。頼れる大人はいない。ダリアももういない。出荷された先に待つのは死。だけど。

（…大好きな家族が、エマ達がいる。何がなんでも生き残ってみせる。…エマ達を死なせてなんてたまるもんか。）

青空、晴天。一見すればうららかな秋のある日のこと。

私は胸に、一つの大きな決意を固めた。

優しい世界

（…大好きな家族が、エマ達がいる。何がなんでも生き残ってみせる。…エマ達を死なせてなんてたまるもんか。）

そう心に決めた5歳の秋。それから時は過ぎ、私はいつの間にか――6歳になろうとしていた。

ぽかぽかと陽射しが暖かい。気を抜けば寝てしまいそうな春の午後、突然エマが言い出した。

「ねぇ！皆で鬼ごっこ王者決定戦しない？」

参加しなければ良かった。なんて私が後悔するのは開催されて僅か１０分後のこと。

ノーマンの猛攻に耐えられず、私が最初の犠牲者となった後のことだった。

＊

散々走り回ったせいか息がしんどい。私は呼吸を整える為に肩で大きく息を吸った。

…ノーマンこわい。

私の鬼ごっこの感想はただ一つだった。

どれだけ逃げても考えてもエスパーかよとツッコミたくなるくらいに次の手をどんどん読まれる。木の影に隠れようとして、その影からノーマンが顔を出した時は真面目に心臓が止まるかと思った。

齢六歳でこれとかもう勝てる気がしない。むしろ十二歳のノーマン相手に１０分もったエマは人間じゃない。流石フルスコア。半端ないって。

深呼吸をしてふと顔を上げると、丁度そのタイミングで皆がワッと沸いた。どうやら粗方ノーマンに捕まって、エマとの一騎打ちが始まったらしい。

…これは多分、５分もかからずに二回戦が始まるやつだ。そう察した私はそっと皆の輪を抜け出した。

私は皆から少し離れて、森の端にある林に行くことにした。そこはあまり人が来ない、いわゆる〝穴場〟と言うやつで私のお気に入りの昼寝スポットなのだ。
せっかくの良い天気だし、二度寝か三度寝しても良いかもしれない。ルンルン気分で私がそこを訪れると、今日は先約が一人いた。

「レイ？ここで何してるの？」
話しかけると、本を読んでいたレイはゆっくりと顔を上げた。その頭には幾つか葉っぱが散っている。いつからここにいたんだろう。
「…別に。」
レイは一言そう言ったっきり、本へと視線を戻してしまった。
…レイは六歳の誕生日を皮切りに、滅多に一緒に遊ばなくなった。変わりに図書館に通うようになって、狂ったように本を読み始めたのだ。
傍目にはレイが読書に目覚めたようにしか見えないけれど。…原作を知る私は、その理由を知っている。

私は少し考えた後、レイの隣に腰を下ろした。レイはまさか隣に座られるとは思っていなかったらしく、目に見えて動揺した。

「…何だよ」
「ううん、何でも。」
ごろりと寝転ぶと、レイが呆れたように眉をひそめた。そんなレイの前髪を春の風が優しく巻き上げて掬う。
…私はその場面を見ていないけれど、原作通りならレイは既に〝内通者〟であり〝ママの犬〟だ。きっとその苦労も苦痛も、計り知れないものだろう。
せめて少しは、気の抜ける時間があってもいい。気を張らなくてもゆっくりする時間が出来ればいい。
そう思って私は欠伸を一つした。一応リラックスしていいよ、のサインのつもりだ。
するとレイはため息を一つついて、パタンと本を閉じた。

陽射しは変わらずぽかぽかと瞬いている。並んで寝転ぶ私とレイの間には、酷くゆったりとした時間が流れていた。
こうしているとここが『農園』だという事実も、全部夢だった様な気さえしてくる。
少しして欠伸が止まらなくなった頃。心地良い眠気に身を任せていると、レイが小さな声で切り出した。

「…例えば、」
「うん？」
「ここが孤児院じゃなかったら…どうする」

ザア、と木が揺れた。木の葉がパラパラと舞い上がる。私は黙ったまま、レイの言葉の続きを待った。

「ここは孤児院じゃなくて…今まで教えられてきたことが全部嘘で。本当は悪夢みたいな…そんな場所だったら。」
「…悪夢？」
「…到底有り得ないような、残酷な場所。」

それは私に話しかけていると言うよりは、独り言に近いような気がした。ポツポツと喋る声は淡々と静かで、いつも冷静なレイらしい。

「死にたくなかったら逃げるしか無くて、でも逃げた先にも安全な場所なんてない。だから結局逃げることなんて出来ないんだよ。」

「…うん」

「…馬鹿みたいだろ、こんな妄想じみたの。」

ハッ、と自虐的にレイが笑った。風が強くなってきたのかざわざわと木々がさざめく。そして少しして、私は口を開いた。

「…じゃあ逃げなきゃだね。それは。」

「…は？」

レイが素っ頓狂な声を上げた。レイは信じられない物を見たように目を見開いている。視線が痛い。

「ならあれだね、皆でここから脱出しないとだね。あ、その前に作戦を立てないとなのか。逃げた先が安全とは限らないから…」

「…え？はぁ？」

「まずはノーマンとエマを仲間に引き込まなきゃね。それからギルダと、ドンにも話さ

なきゃ。後はご飯とか服とか色々用意して、それから――」

「ちょ、ちょちょ、待て、待て待て。」

レイがストップをかけるように私の目の前に掌を翳した。レイの手は震えている。レイの前髪がバサバサと舞ったせいで、レイの表情は分からなかった。

「――馬鹿に、しねぇの。」

レイがか細く、小さな声で言う。きっと私に切り出すのだって、レイにとっては相当な勇気が必要だった筈だ。

―もしかしたらレイは、私に笑い飛ばされることは覚悟していたのかもしれない。

「しないよ。だってレイ、馬鹿にしたことなんてないじゃんか。」

―信じてるよ。兄妹だもん。

レイの細い目が目一杯に開かれた。丸い瞳に沢山の光が差し込んで、キラキラと光った。

まだ六歳なこともあってか、レイの瞳はあどけない。―瞳が零れてしまいそうだ、なんて。そんなメルヘンな例えが頭に浮かんだ。

レイが口をきゅっと引き結ぶ。レイはやがて起き上がって、私を覗き込むようにして上体を起こした。…レイの肩越しに、ちらりと太陽が写り込む。

「…なぁ、マリー。」

レイのまつ毛がぱちぱち光っているのが見えた。額まで伸びた私の前髪に、レイの指が滑り込んでかきあげられる。

レイと目が合う。レイの指が前髪から輪郭を伝って、なぞるように私の頬を滑っていく。

最後まで辿りきった時、意を決したようにレイが口を開いた。

「…俺、本当は、」

「あーーっ!やっと見つけた!マリー!!とレーイ!!!」

その声が響いた途端、瞬時にレイが私の上から飛び退いた。思わずびっくりして肩を跳ねさせてしまう。すると一瞬おいて隣の茂みが揺れ、エマが顔を出した。

「もー!二人とも探したんだよ!鬼ごっこ!やろ!」

ぴょこぴょこ効果音が付きそうな程エマが跳ねる。どうやら既に鬼ごっこを楽しんできた後らしく、エマの制服は土埃で汚れていた。

「…僕は一応止めたんだよ?邪魔しちゃ悪いよ、って。」

いつの間に来ていたのか、くすくす笑いながらノーマンが言った。何故かその言葉にレイが頬を染め、ノーマンに掴みかかる。

「ッ、ノーマン!!」
「やだなぁレイ、僕は何も言ってないよ?」
ケラケラとノーマンが笑う。どうやらノーマンがレイをからかったらしい。からかった理由に付いてはいまいち分からなかった。天才のやることはよく分からない。
「ねぇレイ、レイは今日も鬼ごっこ参加しないの?」
きょとん、とエマが聞いた。多分レイが本を持っていたから、純粋な疑問だったのだろう。
レイは罰が悪そうに頭をかくと、遠慮がちに言った。
「…や、別に…」
「参加するの!?やったー!!」
言い終わらないうちにエマがレイの手を取って高く掲げた。もう今日のレイの鬼ごっこ参加は確定らしい。
レイは嫌そうな顔をしながらも満更でも無さそうだった。口元に小さく笑みが浮かんでいる。

…良かった、と素直にそう思った。まだレイが笑える世界で、楽しいと思える世界で。本当に良かった。

「マリー！おいでよ！次はね、鬼の人数を増やしてみようかって思ってたんだ！」
「どうせまたノーマンの一人勝ちだろ。」
「そうとは限らないよ、レイ。どうなるかなんて誰にも分からないでしょ？」

わいわい、三人が話している。エマが笑って私を手招きした。三人とも私が来るまで、足並みを揃えて待ってくれている。

「…ありがとう、じゃあ私も参加しようかな！」

あぁ、こういうのを本当の家族って言うのかな。本当の幸せって言うのかな。
私は満たされた気持ちで、先を歩く三人の後を追った。

小さな妹

「今日からコニーはあなた達の部屋よ。よろしくね。」
そう言ってママが連れてきたのは、小さな女の子だった。少し伸びた髪をツインテールに結って、遠慮がちにこちらを伺っている。
—あぁ、もうそんなに原作が近付いているのか。なんて。その子を見ながら苦しく思った。

＊

「コニー、私はマリーだよ。よろしくね」
そう話しかけると、コニーは驚いたのかぴゃっとママの後ろへ逃げてしまった。苦笑したママがコニーの頭を撫でて言う。
「コニーは少し人見知りさんなのよね？」
コニーが小さくこくこくと頷いた。幼気なその仕草に面食らってしまった。何この可愛い生き物。

「マリー、同じ部屋だしコニーのことをよろしくお願いね。」
了解の意味を込めてこくりと頷くとママはコニーを一撫でして行ってしまった。ママは今日も忙しいらしい。
ママが居なくなってしまったためかコニーが不安そうに視線を巡らせる。
コニーの目線に合わせようとしゃがむと、コニーはびくりと肩を震わせた。…しまった。怖がらせちゃったかな。

—…そう言えば、私も初めて大きい子達に混ざった日は不安で仕方無かったなぁ。大きい子達は私よりずっと背が高くて、別世界の人のようで少し恐ろしかった。
きっとダリアが話しかけてくれなかったら、私はずっとひとりぼっちだった。

もう居ないダリアのことを思い出して少し目頭が熱くなった。コニーが心配そうに顔を覗き込んでくれる。優しい。
私は手を伸ばして丁度目の前の位置にあるコニーの頭をゆっくりと撫でた。一瞬コニーは逃げてしまうかなと思ったけれど、逃げなかった。
「何か不安なことがあったらいつでも言ってね。絶対に力になるから。」
そう言うとコニーはぱちくりと目を瞬かせた。少し間を置いて控えめに頷いてくれ

る。かわいい。

「じゃあトイレの場所とかお風呂の場所を案内するね。行こうか？」

コニーに手を差し出すとぎゅっと握り返してくれた。その小さな手は8歳になる私の手とは全然違う。柔らかくて、ふにふにしていて、守りたいなと思える手だった。

「…何だか懐かれたね？」

テストの終わった洗濯の時間、私と同じ当番だったギルダが微笑ましそうに言った。その目線の先には新しい妹、コニーがいる。

コニーは私の服の裾をつまんで、作業するギルダの手元をじっと見つめていた。

「…えへ。うん、嬉しい。」

正直言っていつもより二割増でにまにましてる自信がある。コニーが可愛くて今日も楽しい。

私が動くと雛鳥みたいに後を付いてきてくれるし、時々手を繋いでくれる。たまに何か言いたいことがある時は私の服の裾をくいくい引っ張ってくれる。かわいい。年の離れた妹がいるってこんな感じなのかな。

何というか日々のストレスが吹っ飛ぶ癒しパワーだと思う。昔まだ私が働いてた時に戻れるのなら、是非とも連れて歩きたい。

「あれ？マリーにギルダ、コニーもいんじゃん。３人でなにしてんの？」

その声と共ににゅっと洗い場に影が伸びた。驚いて見上げるとその正体はドンだった。私達の組み合わせが珍しかったのか話しかけに来てくれたらしい。

ドンは７歳の現時点でもハウスの上位を争う高身長だ。どうやら早いうちから成長期が来るタイプだったようで、元々高めの身長はにょきにょきと伸び続けている。

ふと嫌な予感がした。…もしかしたら、コニーとドンがまともに顔を合わせるのはこれが初めてなんじゃないか？

…目線の低いコニーにとって、身長の高いドンは怪物のように見えてるんじゃないか？

そう思った予想は的中したらしく、コニーは小さく悲鳴を上げて丸まってしまった。

「もー、ドンが怖がらせるからー。」

「えっ!?」

ギルダが呆れたようにため息をついた。ドンにはそんなつもりはなかったようでおろおろと動揺している。ギルダが「大丈夫よ?」とコニーに声をかけてもコニーは頑なに起きようとしなかった。

「…コニー?」

コニーが私の服に顔を埋めたままふるふると首を振る。どうやら意地でも顔を上げたくないらしい。というかちょっと怖いのかな。

私はドンを手招きして、コニーの目線と同じくらいにしゃがませた。そしてその手に洗濯したばかりのシャツを握らせる。

顔の前で翳しておくようにドンに言ってそれからコニーにもう一度声をかけた。

「ねぇねぇ、ほらコニー。シャツが何か言いたいみたいだよ?」

ドンはそれだけで私の意図を察したらしい。濡れたシャツをお面のように顔の前へ翳してうやうやしく話し始めた。

「うっ…ゴホン!こんにちは、わたくしはシャツの妖精です。」

あんまりにも面白かったので私は思わず噴き出してしまった。隣でドンの行動を見守っていたギルダも肩を震わせている。

ドンは熱くなって周りが見えなくなる時もあるけれど、小さい子の面倒を見るのは一番上手い。ちびっこのお相手は断トツハウスＮＯ．１だ。

コニーはびっくりしたのか、きょとんとしたままドンのシャツを見つめている。

「先程はわたくしの部下、ドンが失礼致しました。うるわしきレディ、許して下さいますかな？」

シャツが下手なお辞儀をして言った。コニーは首を傾げて、一言。

「…うるわしき？れでぃ？ってなぁに？」

「ちょ、待ってドン、これコニー絶対意味分かってないよ…っふふ、」

「えっマジで!?」

「ちょ、もう無理、あは、あははは！」

きっとハウスの本で得た知識だろうけど、〝うるわしきレディ〟だなんてドンにしてはあまりにも似合わない言葉選びだ。とうとう耐えきれなくなって私もギルダも笑い出してしまった。

一人、コニーだけが状況を理解していないのか変わらず首を傾げている。

「……ふ、ふふ、ふ」

コニーがふにゃりと笑った。どうやら私とギルダに釣られたらしい。ドンは少し顔を赤くして、照れたように項をかいた。

「…え、えっと、コニー。俺はドン。さっきは怖がらせてごめんな?」

ドンがそっとシャツの隙間からコニーの様子を伺う。コニーはふるふると顔を横に振って、それから控えめに微笑んだ。

「…私も、怖くなって、ごめんなさい。」

「いいって、いいって。謝んなよ。いきなり人が現れたらそりゃあ普通に怖いもんな。」

だからさ、仲直りしよーぜ。ドンがにっと笑って手を差し出す。コニーは少し目を見開いて、それから嬉しそうに破顔した。

「…うん!」

コニーがぎゅっとドンの手を握る。仲直りの握手は成功らしい。丸く収まって良かった、と私とギルダも息をついた。

――どうやら、コニーとドンは意外と相性が良かったらしい。私にずっとくっ付いて回っていたコニーも、その日からはドンにくっ付いている所を見かけることが多くなった。

コニーを連れ歩けなくなったのはやっぱりちょっと寂しいけれど。嬉しそうなコニーを見てたら、これもこれで良かったかなと思えた。

＊

私の知っている原作は、絶望的なストーリーのわりに死亡するキャラクターが少ない。

何故ならエマが全員で脱獄することを望むから。成し遂げるからだ。

けれど、だからこそどうしても――最初の犠牲者、コニーを助ける方法が分からない。

「…あのね、マリー。髪の毛、結んで欲しいの。いい？」

コニーがもじもじしながらもお願いしてくれた。断るはずがない。「いいよ。こっちおいで。」と答えて椅子に座らせる。

コニーの髪の毛は柔らかくて、ふわふわで。それで小さな子特有のいい匂いがした。

「あのね、マリー。私のこと気にかけてくれてありがとう。」

コニーがぽつりと呟くように言う。椅子の後ろに立った私は、正面を向く彼女の表情が分からない。思わずコニーの髪の毛を結う手が止まった。

「私ね、マリーのこと大好きだよ。」

――おい、神様。お前、本当にろくな仕事しないな。なんでこんな優しい子が。…残

酷な結末を、辿る運命になってるんだ。

「マリー？どうしたの？…泣いてるの？」

コニーの手が暖かい。けれどあと三年も経てば。この手は温もりを失ってしまうのだ。あの寒々しいトンネルで、最後に惨い恐怖を感じながら。1人寂しく命を落としてしまうんだ。

「…コニー、私もあなたのこと大好きだよ。」

――だから、お願いだから死なないで。

最後は、口に出せなかった。それを出したらその先が。エマやレイ、ノーマンの、皆の結末が変わってしまう。二度目以降の脱獄は不可能に等しい。コニー以上に沢山の兄妹達が死んでしまう。

…コニー、ごめんね。見ていることしか出来なくてごめんね。逃がしてあげられなく

てごめんね。

「泣かないで、マリー…」

コニーが抱きしめてくれる。コニーの心音がトクトクと聞こえる。まだ生きてる。生きている音だ。

コニーを抱き締めながら、どうかどうかと必死に願った。願うことならこの子も、この先出荷される予定のハオやセディも。どうにかして一緒に逃げて、助かる未来を。

――そんな未来なんて、ある筈がないのに。

私には何も出来ない、変えられない。…そう思い知った夜だった。

幸せの終わり

——やばい。何がやばいかって？端的に言うなら命の危機。

「今回は残念だったわね、マリー。明日は頑張ってね。」

ママがそう言って頭を撫でてくれる。嬉しい。けれどママ、明日なんて悠長な事言ってる場合じゃない。

ママは気が付いていないと思うけれど、私は原作を知っているから。—このテスト、そしてスコアから導き出される本当の意味を。

…やべぇ。出荷（ころ）される。

満点の半分、１５０。私は結果が書かれた紙を握りしめながら、昨日寝落ちした自分を呪った。

＊

ここに来て、一番頭を悩ませたこと。…それは言わずもがなテストである。
ここグレイス＝フィールドハウスの子供達は毎日テストを受けるのが決まりだ。一応建前は『学校の変わりに』となっているけれど、その実は食用児の質の向上、そして出荷順を決めるためだけに行われるものだ。
毎日行われるそのテストで、スコアが低い者から順に〝収穫〟されて行く。つまり、死にたくないのなら高いスコアを取り続けるしかないのだ。
私はそれに酷く苦戦していた。
元々頭はいい方じゃない。家が貧乏過ぎてろくに学校も通えていなかったから。辛うじて中学は卒業したけれど後はずっと働き詰めだったし。
５歳の時に記憶を思い出してからずっと必死に勉強してきたけれどやっぱり上手くいかなかった。何とか半分は取れるもののそれ以上に点が上がらない。
せいぜい１８０が限度の今のスコアでこのまま行けば…１０歳になるまでには出荷されてしまうだろうと、予想は付いていた。

「ごめんエマ、今日の鬼ごっこはパスで。」
すれ違ったエマにそう声をかけると、エマは驚いたようで目を瞬かせた。ここ最近は

体力向上のために毎日参加していたから、私が抜けるなんて思わなかったのだろう。
「どうしたの？体調悪い？」
「ううん、その、テストの点が悪くて…」
エマは心当たりがあったのか、そっかぁと納得してくれた。
「頑張ってね、マリー！」
そう言いながらエマが手を上げる。エマに合わせて手を上げるとぱちん、と掌が合わさった。ハイタッチをしてくれたらしい。
エマはハイタッチをすませると「じゃあまた今度ね！」と手を振りながら走っていってしまった。きっと庭へ行っていつも通り鬼ごっこを始めるんだろう。
「…エマは凄いなぁ…」
思わずそう呟いてしまった。エマは外遊びを好むけれど、勉強をしない日は1日も無い。ノーマンやレイのようにあからさまではないけれど、彼女も努力をする人なのだ。
…私も頑張らないと。そう決意をし直して勉強道具を手に図書室へ向かった。

図書室のドアを開ける。どうやらまだ誰もいないらしく図書室は静まりかえっていた。
私は適当な机を見つけると、ママから貰った宿題を上に広げた。宿題はママに無理を

言って用意してもらったものだ。

まだ時間があるなんて呑気に構えてはいられない。1問でも2問でも出来る問題を——生き残る確率を増やさないと。

——カリカリと自分が滑らす鉛筆の音が反響する。外からはうっすら皆の歓声が聞こえていた。

多分鬼ごっこが始まったんだろう。今日の鬼はノーマンかな。それともエマかな。またコニーが転んで怪我とかしてないかな。ギルダとドンは揉めてないかな。

…あぁ、ダメダメ。集中集中。気合いを込めてぱちんと頬を叩く。痛い。

もう一度宿題を広げて、私はもう一回問題と向き合った。

『マリー！ほらこっち！こっちから逃げるんだよ！』

…

そう言えば、初めに鬼ごっこを教わったのはダリアからだった。まだ上手く走れない私の手を引いて一緒に走ってくれたんだ。ダリアは心強かったなぁ。頭も良くて、足も

早くて。

「っ、いだっ」

ごちん。無意識のうちに手を滑らせて頭を打ってしまった。思い切りぶつけたせいか結構痛い。

くそ、また集中出来てなかった。…自業自得だけど。

ズキズキ痛む額に手を当ててみる。どうやらたんこぶは出来ていないらしい。セーフだったかとほっと息を吐いた。

何だか最近、ふとした時にダリアのことを思い出すことが増えた。その度に悲しくなるのに、思い出してしまうのは何でだろう。…私の死期が近いからだろうか。

ええい、待て待て弱気になるな。私はぶんぶんと頭を振ってネガティブな考えをを追い出そうとした。けれどその度に、ダリアの笑顔が頭によぎる。

…ダリアは殺された。多分スコアの成績が落ちたからだ。そう言えば里子に出される何日か前も、ダリアは最近テストの調子が悪いって嘆いていた。

ダリア程の女の子でも、呆気なくあっさりと出荷されてしまう。なのに、私なんかが生き残って行けるのかな。

ノーマンもレイもエマも、もう頭角を表している。この間も3人ともフルスコアを取ってママに褒められていたから、きっとママも期待してる。三人は十二歳まで出荷されない。生き残る。

…けど、私は？フルスコアどころか２００すら取れていない私は？

最後まで生き残れる？…十歳になるまでに殺される？

「…死ぬのかなぁ…私…」

「何で死ぬんだよ。大袈裟だな」

唐突に声が響く。びっくりして顔を上げた。

え、待って、うそだ。全然気配なかったじゃん。誰も居なかったじゃん。この時間に人がいるなんて聞いてない。

「レイ…いつから…」
「お前がため息を付いて宿題を広げた辺りだな。」
「……最初からじゃん……」

いつの間にか目の前の席に座っていたレイが、ぺらりと手に持った本のページを捲る。そうだ、レイの存在を忘れてた。レイは最近図書室に入り浸ってたんだった。
なんてことだ。つまり私があーだのこーだの悩んでグダグダやってる所も見られてた訳だ。なんてこった。穴があったら入りたい。入らせてください。
恥ずかしすぎて顔を上げられない。気まずい沈黙が図書室に落ちる。もうダメだ撤退しようと席を立とうとすると、レイが口を開いた。

「…んで、どこが分かんねぇの。」
「えっ」
思わず変な声が出てしまった。レイが早く言えと目線で訴えかけてくる。
「…テスト、悪かったんだろ。少しくらいなら見てやるから。」

レイの後ろに後光が見えた。神様かよ。知ってた。

「…あ、ありがとう。」

早くお礼をと口を開いた結果、口元が緩んでしまった。しまった油断してた。慌てて表情筋を戻そうと苦戦していると、レイが頬杖を付いて言う。

「…早く出せよ。」

むすりとした声音に機嫌を損ねてしまったかと思ったけれど、レイの頬は心無しか色付いているように見えた。

…これはもしかして照れ隠しかな。そう思うと微笑ましくて、文句を言う気もなくなってしまった。

レイは意地悪なところもあるけれど、本当に困っている時は手を貸してくれる。一見兄妹にも無頓智なように見えるけれど、本当は誰よりも気をかけていることを知っている。

必要ないものは切り捨てる冷酷さを持ちながら、情を捨てきれないお人好し。

そこがレイの良さであって、そして短所なんじゃないかと。私は勝手に思っている。

「へぇー、マリーが鬼ごっこに来なかったのそう言う理由だったんだね。」

突然、後ろから声が聞こえた。ぽんと肩に手を置かれ思わず椅子から立ち上がってしまう。

恐る恐る振り返る。後ろに立っていたのはにこにこと笑うノーマンだった。…全く気配が無かった。忍者なの?それとも単に私が鈍感なだけ?

レイを見ると、驚いたようでぱちぱちと瞬きを繰り返していた。ノーマンには気付いていなかったらしい。

「さっきエマにマリーが鬼ごっこに参加しないって聞いてね。何かあったのかな〜って思って、来ちゃった。」

びっくりした?とノーマンが聞いてくる。びっくりしたどころか、心臓が止まるかと思った。

相変わらず笑みを崩さないノーマンの考えてる事がイマイチ分からない。ノーマンは何だかんだエマといることが多いから、てっきりエマと鬼ごっこしてるかと思った。

「そう言うことなら一人より二人で教えた方が効率いいよね。ね？レイ」

ノーマンがレイの肩に腕を回す。レイは辛うじて返事をしていたものの、目が思いっきり死んでいた。さっきのノーマンは心臓に悪いよね。分かる。

「僕も手伝うよ。何でも聞いて？」

ノーマンがそう言ってくれたので、ノーマンにも勉強を教えてもらうことになった。ここにはもしかしたら神様しかいないのかもしれない。

自由時間の間中、私は二人につきっきりで勉強を教えて貰った。さすがに自由時間いっぱいは申し訳ないと断ろうとしたけれど、ノーマンに自分の勉強にもなるからと言われてしまうと何も言えなかった。借りを作ってしまった。いつか二人に恩返ししなければ。

ノーマンとレイの教え方には無駄がない。分からないと言えば解説と、どうしてそうなるかまで細かく教えてくれる。

目から鱗な計算方法とかも教えて貰って、あぁだからこの二人は天才なのかと妙に納得してしまった。多分二人とも恐ろしく頭の回転が早いのだ。常人なら１０で済ましてしまうところを１００も２００もこなしたり、めちゃくちゃ密度の濃い１０を発見してしまう人。

そんなこんなで自由時間が終わる頃には、私はすっかりどんな問題も解けるようになっていた。

「レイ、ノーマン、本当にありがとう。助かったよ。」

私は自由時間が終わる頃、二人に感謝の意を込めてそう声をかけた。

「どういたしまして。マリーの力になれて良かったよ。」

ノーマンが微笑みながら言う。あぁ、ノーマンの背後にも後光が見える。ありがたや。

「また分からなくなったら言えよ。俺でもノーマンでもどっちでもいいから。」

レイもそう声をかけてくれる。心無しか機嫌が良さそうだった。久しぶりに3人で話したし、楽しかったかのかもしれない。

…もしまた二人に教えてもらえる機会があったなら、今度はエマにも声をかけよう。ドンやギルダを呼んでも良いかもしれない。きっと皆でやればもっと賑やかで楽しくなる。

「ねぇ、マリー。」

ふとノーマンに話しかけられた。部屋に戻りかけた足を止め、振り返る。

「…僕って脈ありかな？」

「ばっ…!?」とレイが声を上げた。一瞬言われた意味が分からなかった。

…脈ってアレだよね。手首に指を当てて計るやつ。

「…生きてる限りあるんじゃない？」

ブハッとノーマンが吹き出した。どうやらツボに入ったらしく笑い転げている。どこに笑う要素があったんだろう。やっぱり天才はよく分からない。

笑いながらノーマンがレイに耳打ちした。レイが体をこわばらせる。何かノーマンがレイに言ったように見えたけれど、私にはよく聞こえなかった。

「じゃあマリー、また明日！明日のテスト頑張ってね。」

ノーマンが笑いながら去っていく。その姿が図書室から居なくなったところで、レイに肩を掴まれた。

「…マリー、これから絶っっ対アイツと二人っきりになるなよ。」

「え、なんで？」

「何でも！」

レイの形相があまりに必死だったので、私はとりあえず頷いた。

…なんでレイがそんなことを言い出したのかは結局分からなかった。ノーマンに言われた何かのせいかもしれない。

＊

「それじゃあ、結果を返すわね。まず――」

どくんどくんと心臓の音が鳴る。私は腕を組んで天へと祈るポーズを取った。

勉強会効果か、今日のテストは信じられないほどスラスラと解けた。きっと昨日よりはスコアが上がっている…筈だ。

ただ問題は、１８０を取れても安心出来ないことだ。確か原作ではドンやギルダも２００に近いスコアを出していた筈だから。１０歳以上は２００に近いスコアを出さないと出荷なんてことも十分にありえる。

出荷の目安が分からない以上、下手に慢心は出来ないのだ。

あぁ、神さま仏さま。どうか１５０ではありませんように。せめて１８０は取れていますように。まだ死にたくない。まだ生きていたい。

お願い神様。どうか、どうか――…

その時ポコンと頭をはたかれた。驚いて頭を抑える。降ってきた先を見上げると、私を叩いたのは呆れ顔のレイだった。

「…バカ。呼ばれてんぞ。」

前を向く。エマとノーマンがこちらを向いて笑っている。エマがぶんぶんと手を振って、ノーマンがこっちこっちと手招きをしていた。

前に立ったママが満面の笑みで、両手を広げて待っていてくれる。

「やったわね、マリー！フルスコアよ！」

ぎゅう、ママが抱きしめてくれた。ノーマンが良かったねと声をかけてくれる。エマがやったー！と抱きついてくれる。レイが頭を撫でてくれる。

…え、フルスコア？フルスコア、取れたの？私が？

「…よ、かっ、た、」

出した声は意図せず震えた。ひくりと喉が鳴って、遅れて涙が溢れた。

三人は笑って、しゃくりあげる私の背中を撫でてくれた。

＊

――どこか私は、心のどこかで現実逃避をしていたのかもしれない。

ハウスでの時間は、信じられない程に酷く穏やかで、ゆっくりなものだったから。

ここが本当は『農園』で、ここにいる兄妹達も食べられるために育てられているなんて。とてもじゃないけど信じられなかったから。

――だから、きっと。ここはグレイス＝フィールドハウスじゃなくて。約束のネバーランドの世界じゃなくて。

本当はただの、幸せな孤児院なんじゃないかって。

「皆聞いて。お話があるの。実はね、」

「――コニーの里親が決まったわ。」

カツン、と持っていたコップを取り落としてしまった。頭からペンキをぶちまけられたように、思考が白に染まる。

おめでとう、と口々に上がる賞賛の声。盛り上がる輪の中心で、嬉しそうにはにかむ小さな妹。

その娘が辿る残虐な運命を――知っていながら私は、何も変えられない。

見捨てる

――『ぴったり６時。施設の朝は鐘の音で始まる。』

はしゃぐ小さい子達の賑やかな声。変わらない空、秋の風。増えた落ち葉に小鳥の囀り。

――『施設での暮らしも１０年、気づけば最年長。今は３８人兄弟。性格も年齢も肌の色も様々。性格も年齢も肌の色もさまざま。私達に血の繋がりはない。
大好きなママ、大好きなみんな。血の繋がりはなくても大切な家族。』

――『全て私の、私達の普通。１０年間疑ったことすらなかった当たり前の日常。』

私が、私だけが。気付いている。

今日、コニーは死ぬ(殺される)。

どうしても食事が喉を通らなかった。
牛乳にも口を付けられなかった。パンもスープも隣に座っていたトーマとラニにあげた。
体調が悪くてと言い訳して食事の席を立つ。
何も食べてないのに吐き気が止まらない。ぐらぐらと足元が安定しない。結局廊下の端で動けなくなってしまって、ギルダに手を引いてもらって医務室に行った。
「…あら、熱があるわね。」
体温計を見たママは眉を顰めてそう言った。テストの時間は寝ていなさい、そう言い残して部屋を出て行った。
静かな医務室に、こちこちと時計の音が響く。

…あぁ、どうしよう。このままだとコニーが死んでしまう。

出来ることなら今すぐにコニーの手を取って逃げ出したい。塀を超えて、森へ抜けて。シェルターへと皆で逃げ出したい。

…出来るわけない。分かってる。分かっているけど。

息が出来ない。耳鳴りがする。ガンガンと頭が痛む。視界が歪む。嗚呼。

――いやだよ、コニー。

コンコンと控えめに扉がノックされた。ゆっくりとドアが開いて息を呑む。

「…エ、マ？」

ドアを開いたのは、エマだった。
エマはほっとしたように笑うと、医務室の中へと入ってきた。
「ママに聞いたら風邪じゃないみたいだから会ってもいいって。体調はどう？マリー。」
エマがベッドの横の椅子へ腰掛ける。
エマの優しい声音が染みる。思わず泣きそうになってしまって慌てて目頭を抑えた。
「…大丈夫。何でもないよ。」
曖昧にぼかして答えた。…取り繕うことすら出来ない私を、許して欲しい。何も知らないエマにはどうしても話せない。心配をかけたくない。
エマは私の答えを聞くと、少し眉を下げて小さく言った。
「…あのね、マリーが何か悩んでるんじゃないかなって思ってて。」
ぽとりと落とされたその言葉は、染み入るように医務室に広がった。エマは困ったように苦笑しながら続ける。
「ほら、コニーの里親が決まった日。あの日から何となく元気が無いなって思ってたからさ。ね？」

日差しが射し込んでエマを照らした。エマのオレンジ色が太陽のようにキラキラと輝く。

それは本当に、息を呑む程に美しくて。

「何か悩みが合ったら言ってよ！話すだけでも良いからさ、私聞くし！」

いくらでも、とエマが笑う。希望にに呑まれたように視界がチカチカと点滅した。

——助けて、と言ってしまいたかった。

きっとエマなら私の話も真剣に聞いてくれる。信じてくれる。私が逃げたいと言えば逃げようと言ってくれるだろう。

優しい彼女は、絶対に見捨てない。コニーも兄妹も、私でさえ。

——けれど、もし。それで彼女が死んでしまったら。

私は死ぬ以上に後悔する。レイにだってノーマンにだって申し訳が立たない。彼女は死んではいけない。絶対に。

「…コニーに、行って、ほしくない」

嫌だよ。辛いよ。苦しいよ。逃げ出してしまいたい程に苦しい。悲しみに体を引き裂かれて死んでしまいそうだ。

「…さいていだ、わたし。」

コニーの死を知りながら何もしない。何も知らない彼女に教えることもしない。自分のことしか考えてない、自己中で浅はかで傲慢で、最低最悪の屑野郎だ。

「違うよ。」

エマの声が響く。沈んだ空気を断ち切るように、強さを孕むその声が凛と広がる。

「マリーは最低じゃないよ。」

許されたいと、思ってしまった。

「…ご、め…」

エマに手を伸ばした。エマが私の背に腕を回して抱きしめてくれる。
涙や鼻水がエマの服に付いても、エマは黙って抱き締めていてくれていた。暖かくて力強いその手に、私はずっと、甘えていたのだ。

――エマ、私、嘘ついてるんだ。
小さい頃から一緒に育った皆にも、ずっと隠し事をしてるんだよ。
エマにもレイにもノーマンにも、話してないことが沢山ある。
でも怖くて。
未来が変わって、誰かが死んでしまうかと思うと恐ろしくて。

誰にも言えずにいるんだよ。
――本当は、里子なんて真っ赤な嘘だ。
私達は今もずっと――食べられるために生かされているんだよ。

「…マリー?」

エマの肩を掴んだ。動悸が上がる。体が沸騰するみたいに熱くなってクラクラと目眩がした。
呼吸が早くなる。心臓が暴れる。声が震える。
それでも今、言わなければ。

「…っ、エマ!今すぐにここを出――っ」

「…エマ?ここにいるの?」

カチャン、ドアが開いた。…あぁ、なんて間の悪い。

「やっと見つけたわ、エマ。そろそろテストが始まるから早く席に着きなさい。」

「…はぁい。」

ごめんね、また来るからね。エマが申し訳無さそうに言う。私は掴んだエマの肩を離すので、精一杯だった。

「エマと何か話をしていたの?」

ママが話を降ってくれる。能面のように薄っぺらな笑顔だった。

「…ううん、なんでも。」

そう。ママは応えて満足そうに笑った。

＊

会いたくなかった。どうしても。きっと彼女に会ったら私は、泣き喚いてしまうから。

「マリー、入るよ。」

ドアの向こうからエマの声が聞こえる。数回のノックの後、ドアが開かれた。

「具合はどう？体調は回復した？」

エマの声にこくりと頷いた。エマがよかったぁと笑って息を付く。心配してくれていたらしい。

エマが振り返って手招きをした。間を置かずパタパタと足音が響く。ひょこりと顔を出したその娘に、私の中の時間が止まる。

「…コ、ニー、」

小さなリボンが付いたその衣装は、皮肉なほどに華奢な彼女に似合っていた。
胸元で抱かれたリトルバーニーが幸せそうに笑う。ふわふわと揺れるツインテールはきっとママに結んでもらったものだ。
「あのね、マリーにも見て欲しかったの。…似合ってる?」
うん、とっても似合ってる。そう言おうとしたけれど言葉になったかは分からなかった。コニーは私に見えるように数回くるくると回って、それから恥ずかしそうに切り出した。
「…マリーにね、渡したいものがあるの。」
ごそごそとコニーがポケットを探る。やがて彼女は小さな折り紙を取り出した。
「エマにね、折り方を教えてもらったの。マリーにもあげたかったから。」

渡されたのは、小さなうさぎ。

それは、彼女が抱く宝物によく似ていた。

「私からもね、リトルバーニー。私のことわすれないでね。マリー。」

小さなその体を、思い切り抱き寄せた。

コニーからは石鹸とシャンプーのいい香りがした。きっと昨日頑張って洗ったんだろう。今日会うはずの、新しい家族に会うために。

コニー、コニー、コニー。

この体を離したくない。行って欲しくない。行っちゃだめだ。

大人になんてなれないよ。新しい家族なんていないよ。鬼に食べられて死ぬだけなんだよ。

「ふふ、くすぐったいよマリー。」

何も知らないコニーがころころと笑う。涙が止まらなくて、それでもコニーの服は汚せなくて。必死に袖元で目を拭った。

「コニー、私、コニーに、あえて、よかった」

これからこの娘は、どれだけ苦しい思いをするのだろう。信じていた幸せな世界に裏切られて、どれだけの絶望を感じるのだろう。その最期はどんなに孤独で、惨いものに

なるのだろうか。

「ありがとう、本当に、たくさんたくさん、あ、りがと、う」

お願いだから最期までそうやって笑っていて。
孤独も絶望も何も感じず幸せな未来を夢見ていて。
どうか苦しまずに、幸せでいて、コニー。

「…私もありがとう。大好きだよ、マリー。」

私はその場で声を押し殺して泣いた。
微笑むコニーはママが呼びに来るその時まで、ずっと隣にいてくれた。

＊

――――『私達は皆親の顔も生まれた場所も知らない。新しい家族が出来る。旅立ちは嬉しいこと。』

「じゃあ皆、またね。絶対手紙書くからね！いっぱいいっぱい書くからね！」

――元気でね、と皆が声をかけた。泣き出す小さな子もいた。手を握る子もいた。背中を撫でる子もいた。

「…コニー、」

コニーがくるりと振り返った。これから始まる悲劇も絶望も、何も知らない無邪気な笑顔。

何かを言おうとして、けれど言葉にならなくて、それで。

「…またね。また会おうね、コニー。」

在り来りな別れの挨拶に、コニーは本当に嬉しそうに、愛らしく笑顔を見せた。

＊

「コニー!!!?」

食堂からエマの絶叫が聞こえる。

「ど……どうしよう…」
「―ってコニーもう行っちゃったよ?」
「――でもないかも。」

話し声が聞こえる。私は食堂のドアを開けた。

「さっき風呂場の窓から遠く門に明かりがついているのが見えた。見送りについて言ったママも戻ってきてないし、まだコニーは出発してないんだと思う。」

「届けてやろう」
「…ノーマン」
「本当はママに頼んで後から送ってもらうのが筋なんだろうけど、〝コニーの気持ちを考えたら早い方がいい〟――だろ？」

食堂にいたのは４人。ノーマンにエマ、それにレイとギルダ。

「あ、マリー！」
「マリー、どうやらコニーがリトルバーニーを忘れて行ったみたいなんだけれど…」

エマとノーマンに話しかけられる。レイがちらりと私を一瞥した。
きっとここで二人に着いていけば、原作通りコニーの死を目にすることになるんだろう。ハウスの絶対秘密の真実に辿り着くことが出来るのだ。

――けれど。

「いいよ、二人で行ってきて。――二人の方がばれにくいと思うから。」

私は二人のように鬼に遭遇して逃げられる自信が無い。コニーの死を前にして叫ばずにいられる自信がない。――何より、
コニーの死を、信じていたくないのだ。

「そっか、分かった！」
「じゃあ僕らは行ってくるね。」

ノーマンとエマが食堂を出て行く。私はその後を追う気にもなれなくて、足早に食堂を後にした。

＊

――呆気ない、ものなんだ。人が死ぬということは。

レイの言った通り、門には灯りが付いていた。エマやノーマンはそろそろ門に着いただろうか。…コニーを見つけただろうか。

２階に上がろうとして、出来なくなって階段に腰掛けた。

一歩も動きたくなかった。体に力が入らない。膝小僧に顔を埋めて、出来る限りに体を丸めた。いっその事そのまま小さくなって、誰にも知られないままに消えてしまいたかった。

廊下が少しづつ暗くなった。消灯の時間が近付いているのだろう。けれど立ち上がるのも億劫で、ずっと動かずにいた。

――あぁ、多分そろそろ子供部屋にもママが来る。戻らないと。

そう思っても、足が動かない。…何も出来ない。何も変わらない。

ただただ無力で、虚しかった。胸にぽっかり穴が空いたようで、そこから体が冷えていくようで。もうこのままここで夜を越してしまおうかと思った。その時。

ポスン、頭に手が置かれた。

ぐしゃぐしゃと髪の毛を乱暴にかき混ぜられる。突然のことでびっくりして悲鳴をあげてしまった。遠慮ないその手つきは明らかに人間のものだ。

いきなり何するんだよ。そう言おうとして、言葉に詰まった。

「アホ。何してんだこんな所で。」

もう消灯時間だぞ。そう続く声に思わず喉がぐぅとなった。

…レイだった。多分最後の見回りに来たのだろう。レイの持つカンテラがぼうっと辺りを照らす。

「…別、に」

放っておいて欲しかった。一人になりたかった。だから私はレイから逃げるように

階段の隅へと寄って縮こまった。
ため息の一つでも着いて、部屋に帰ってくれれば良かった。きっとレイならそうしてくれると思った。
けれどレイは立ち去ることも無く、私の隣に腰を下ろした。

レイは居座った割に何も言葉を発しなかった。時間だけが過ぎていく。何か意図があるのかと暫く待ったが、やっぱりレイは何もしなかった。
「…そろそろ、ママが来るよ。」
レイは何も答えなかった。廊下の灯りがまた一つ消える。
「どうして、ここに来たの。」
また答えない。沈黙が痛い。早く帰ってくれと、半ばヤケになって言った。
「放っておいて欲しいのに、」
「…放っとかねぇよ。」
カタン、何処かで音が鳴った。辺りはもう暗くてよく見えなかったけど、何故かレイ

の口の動きだけはハッキリと見えた。

「お前は放っておかなかっただろ。」

ぽろり、と頬に涙が伝った。

それを皮切りに溢れる涙を止められなくなった。喉が大袈裟に引きつって、何度も何度もしゃくりあげる。

レイが黙ってハンカチを差し出してくれた。嗚咽が酷くなる。酷い顔をしているだろうに、レイは嫌な顔一つしなかった。

――助けられなかった。知っていながらあの子を行かせた。何も伝えなかった。何も言えなかった。

私が殺したみたいなものだ。私がコニーを死へと導いたんだ。その気になればどんな手を使ったって、あの子を助けられたはずなのに。

「コニーに会いたい、会いたいよ…！」

コニーの体を抱きしめたい。連れ戻して助けたい。今こうしている間にも、あの子は暗いトンネルでひとりぼっちだ。

私はダリアみたいに出来なかった。あの子を救う事が出来なかった。一人になることがどれだけ怖いのか、死ぬことがどれだけ恐ろしいのか、ちゃんと分かっていたのに。知っていたのに。

「…コニーは幸せだったよ。」

レイが独り言のように呟いた。カンテラの灯りが揺れる。

ゆっくりと長い時間をかけて、ハウスが暗がりへと沈んでいった。

＊

――どれだけ辛くたって、苦しくったって、誰にでも平等に朝は来る。

「おはよう、マリー。」
「おはよ！マリー！」
「…おはようエマ、ノーマン。」

――『いつもの朝。まるで全部夢だったみたい。』

人が死んだって何が起こったって時間は変わらず過ぎていく。待っていてなんてくれない。止まってなんかくれない。
―追いつくには、前を向いているしかない。

ぽん、と背中を叩かれる。振り向きもせず去って行く不器用な背中に声をかけた。

「おはよう、レイ。」

いつもの日常。その中にあの子はいない。もう会えない。けど。

（――これ以上、失うことなんて許さない。）

農園を出る。エマ達を救う。ネバーランド（大人になれない世界）を終わらせる。

（――絶対逃げ切ってやる。）

秋の空。積もった落ち葉がかき消すように、ハウスの空を舞い上がった。